

# 発刊にあたって

日蓮宗現代宗教研究所所長 久住謙是

奈良時代、国分尼寺での読誦行は専ら法華経であった。女人成仏を説く提婆達多品は、五障三従と説く女性の救いの灯であったに違いない。

日蓮聖人は、女性救済の保証と役割を重く受けとめ、活現されたのである。

日蓮宗は、依拠の経典と宗祖の姿勢によって、女性の活躍が最も期待される宗門でなければならないのである。

このたび、当研究所女性教師プロジェクトチームにより、本報告書がまとめられた。

日蓮宗八千余名の教師中、一千名以上の女性教師がおり、八人に一人の割合である。

その全女性教師を対象にアンケートを行ったのが、この報告書である。

このアンケートによって、はじめて女性教師像が浮きぼりにされたことの意義は大きい。画期的といえるのではないか。

女性教師の出家の動機、役割、さらに現状における活動が、トータルに把握でき、女性であることの利点やマイナス点、そして、女性教師自身の願い、あるべき理想と現実が、読みとれる。

この客観的事実は、女性教師自身に自立を求め、きびしい中での自己実現が課されているといえよう。

また、宗門全体の中での女性教師の位置づけ、伝道施策、寺院護持の担手としての役割が一層考慮される機会となることを念願したい。

法華系新興教団の伸長は、何よりも女性の信仰と活力に負っていることを思慮するとき、伝統教団の男僧中心組織の発想を転換して、女性の教化力を取り入れ、現代社会に対応した教団づくりを考えるための提言になることを期待したい。

女性教師におかれては、本書の発刊を出発点として、立教開宗円成後のポスト750のこの時期を、布教元年と心得て、一層連帯を強め、ご活躍下さることをご期待申し上げたい。